

第2章 立地と環境

第1節 地理的・自然的環境

(1) 地理的位置(図1・2)

熊本県宇土市が位置する宇土半島は、県中央沿岸部から西に向かって突き出ており、その規模は東西約20km、南北約9km、面積約125km²である。北に有明海、南に八代海と面し、半島先端には天草諸島が連なる。宇土市は本半島北部に位置し、市域は東西約24.8km、南北約7.6km、面積約74.20km²で、東経130度39分30秒、北緯32度41分15秒付近に宇土市役所が立地している。

市域北側には、熊本県三大河川の一つである一級河川・緑川(総流路延長71.25km)と、その支流で同じく一級河川でかつて緑川本流であった浜戸川(同27.30km)が東西に流れており、両流域には広大な沖積平野が広がっている。市北部から東部にかけて県都・熊本市、同南部から西部にかけて宇城市とそれぞれ接している。

(2) 地形・地質(図3~5)

地形 宇土半島は東西に長く、山がちな地形で平地の割合は比較的少ない。宇土市域の地形は、「東部地域」と「西部地域」に分けられ、東部地域は、緑川河口南岸付近から南及び南東に広がり、中心市街地が広がる平地部分を主体とする。一方、西部地域は、市街地の南西約3km地点から南南西に延びて、半島の背骨を形成する中央山稜線



図1 宇土市位置図(一点鎖線は熊本県境を示す)

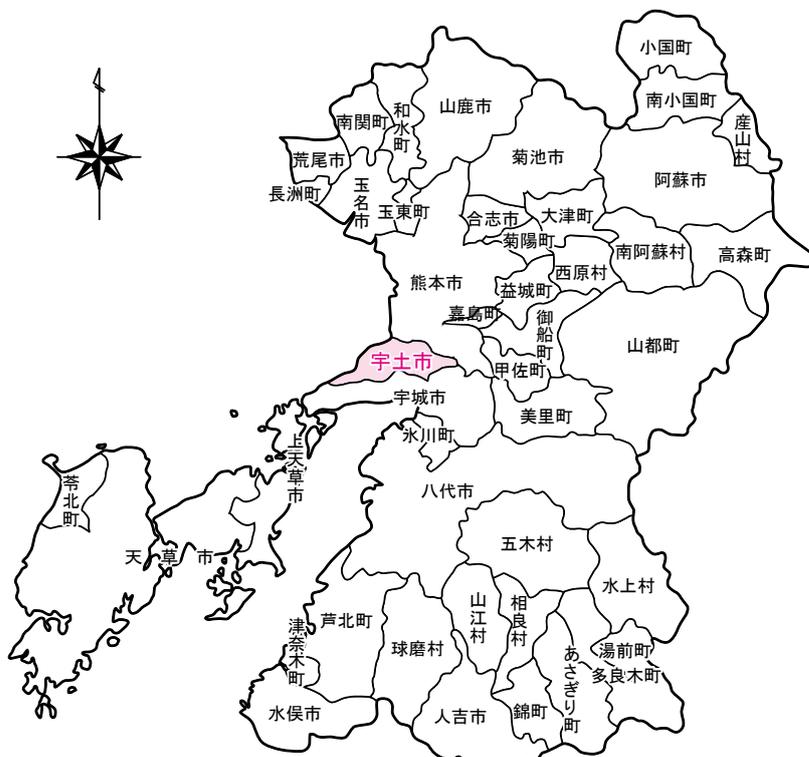


図2 熊本縣市町村配置図



図3 宇土市地形図と主要交通

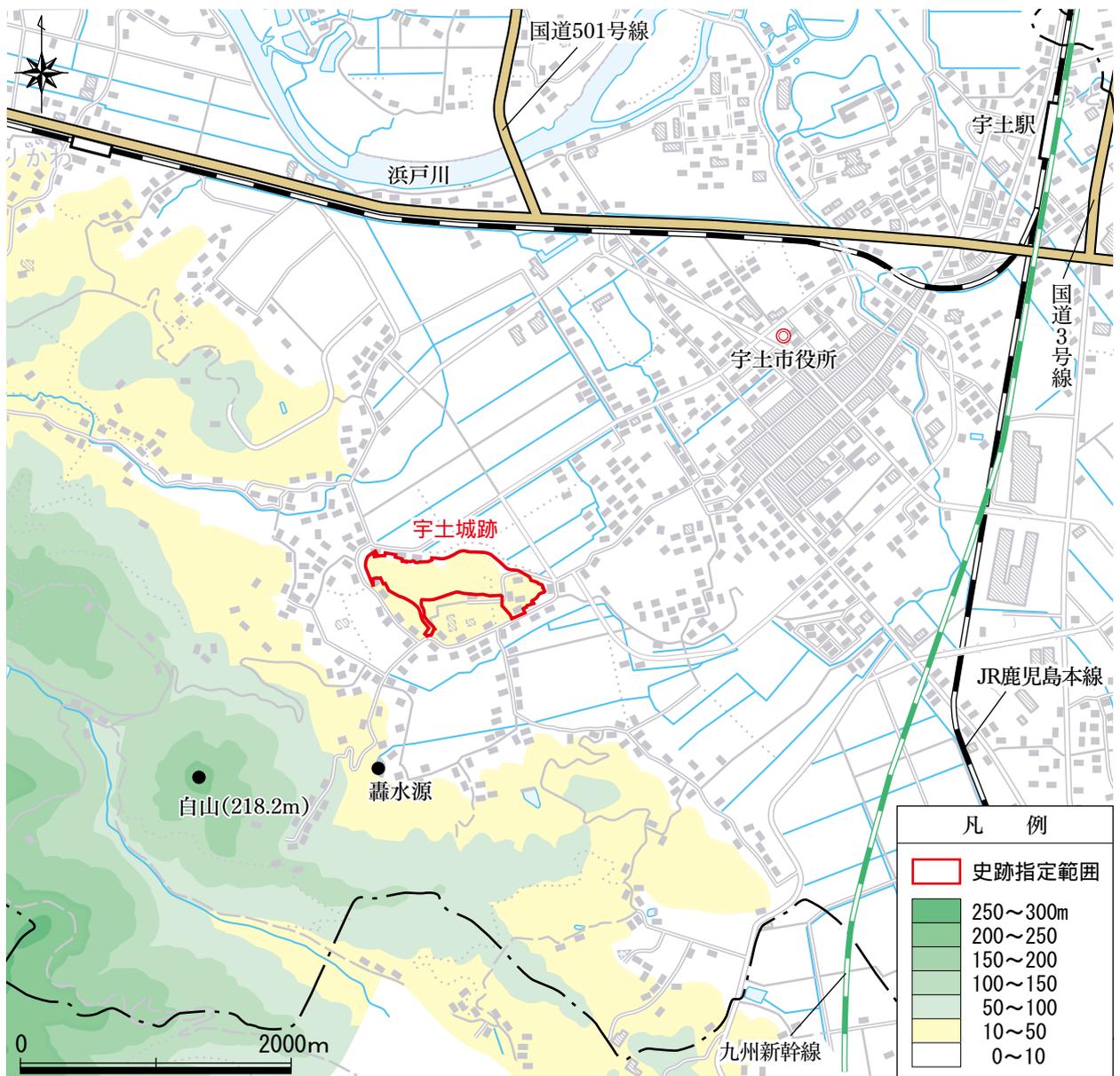
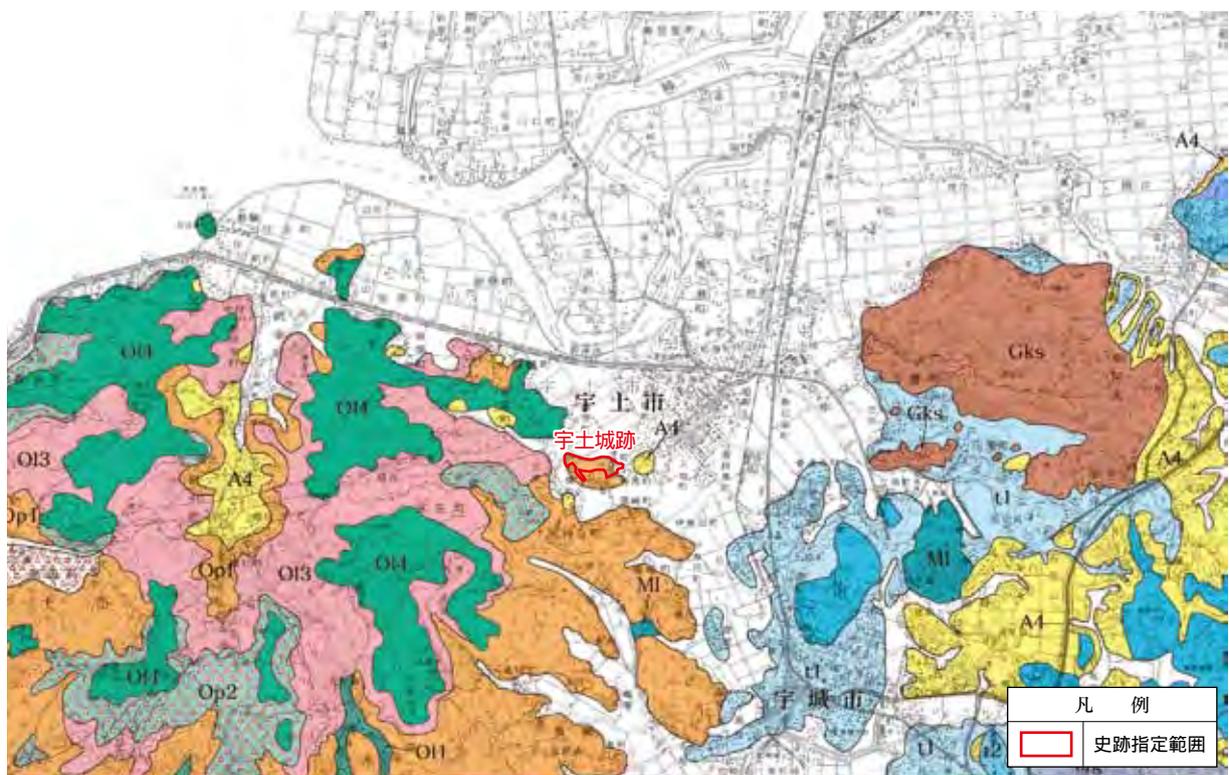


図4 宇土城跡及び周辺地形図

(大岳〔477.6m〕や雄岳〔標高348.0m〕等を含む)の北側に相当する山地と、その山地から有明海沿岸に達するまでの山地部分を主体とする。その範囲は、前者が平野部を主とする東西約9kmの範囲、後者が山地沿岸部を主とする東西約14kmの範囲におおむね区分することができる。なお、熊本平野は東部地域の一部を含んでいる。

本半島を構成する山地は、大岳を中心とする大岳火山系山地と三角岳火山系山地とに分けられ、半島基部には若干の平地を挟んで木原山(雁回山, 314.4m)が存在する。本市の平野は、東部地域において木原山と宇土半島基部の山地に囲まれるように広がるほか、緑川左岸河口部付近にも比較的広い平野がある。主な河川は、緑川と浜戸川のほか、一級河川・潤川(流路延長5.70km)や二級河川・網津川(同4.40km)、同・網田川(同3.60km)等で、緑川と網津川、網田川は有明海に注いでいる。また、宇土半島北側山麓を中心に市内では湧水地が主なもので10ヶ所あり、なかでも轟水源は日本名水百選に選定されている。

地 質 宇土半島には、中生代白亜紀後期から新生代古第三紀にかけて形成された砂岩と頁岩



黒瀬川古期岩類(黒瀬川帯)	第四紀前期更新世	第四紀後期更新世
<p>mg 主として泥質岩(片麻岩・結晶片岩) (肥後変成岩類・間の谷変成岩類)</p>	<p>OI1 大岳古期輝石安山岩溶岩</p>	<p>t1 低位段丘堆積物 保田窪砂礫層・岱明層</p>
<p>中生代後期白亜紀</p>	<p>OI4 大岳新期輝石安山岩溶岩</p>	<p>t2 中位段丘堆積物 詫麻砂礫層・赤田層</p>
<p>Gks 雁回山層</p>	<p>Op2 大岳新期輝石安山岩火砕岩</p>	<p>A4 阿蘇-4火砕流堆積物</p>
<p>MI 御船層群下部層 (基底部を含む)</p>	<p>OI3 大岳新期角閃石安山岩溶岩</p>	
	<p>Op1 大岳新期角閃石安山岩火砕岩</p>	

図5 宇土半島基部地域の地質図(熊本県地質図編纂委員会2008を改変)

が分布し、その上部を新生代第四紀中期に大岳を中心とする約170万年前の火山活動で噴出した安山岩類や凝灰角礫岩類が不整合に覆っている。宇土半島で最も古い岩石は、7000万年前の中生代白亜紀後期の姫浦層群で、アンモナイトやイノセラムス等の化石を産する。なお、砂紋で有名な日本の渚百選「御輿来海岸」でみられる通称「ふとん岩」は、この姫浦層群に属する。

大岳系北東の山麓及び谷沿いには、約9万年前の阿蘇山の大爆発による火砕流の噴出で形成された阿蘇火砕流堆積物（阿蘇 - 4）が点在しており、宇土市網津町や同網引町では、一般的な灰黒色の露頭以外にも、珍しいピンク色を呈する凝灰岩の露頭が存在する。これらの地域で産出する阿蘇溶結凝灰岩は、分布の中心である網津町字馬門まかどの字名を冠して「馬門石」と呼ばれている。また、宇土半島基部の木原山は、中生代白亜紀後期の砂岩や礫岩などの堆積岩を基盤としている。

(3) 気 候 (図6)

熊本県の気候は、県全域が太平洋側気候に属しており、比較的温暖な気候といえるが、冬と夏では寒暖の差が激しいことで知られている。

宇土市付近は、熊本市付近に比べて晴天の日が多く温暖であり、冬の朝夕は熊本市並みに冷え込んで日中は比較的暖かい。一方、真夏日の日数は宇土市と熊本市とでは、ほぼ同数の年間50日以上であり、南風が吹くものの夏は蒸し暑い日が続く。また、雨天の日の降水量も、年間を通じて県内では少ない。雪もぱらつく程度で、積もることは数年に1回程度である。平成20（2008）年から平成24（2012）年の平均気温は17.1℃、降水量は2059mmで、平成25年の平均気温は17.2℃、降水量は1845mmである。

また、南北に開けた市東部地域と、宇土半島中央付近に東西に連なる山塊に影響を受ける同西部地域では気候が少し異なっている。気温の日較差は東部地域では10℃前後であるのに対し、西部地域と同じような気象環境にある半島西端の宇城市三角町では7℃前後しかない。このことから、前者は内陸性気候的、後者は海岸性気候的な特徴を示すといえる。

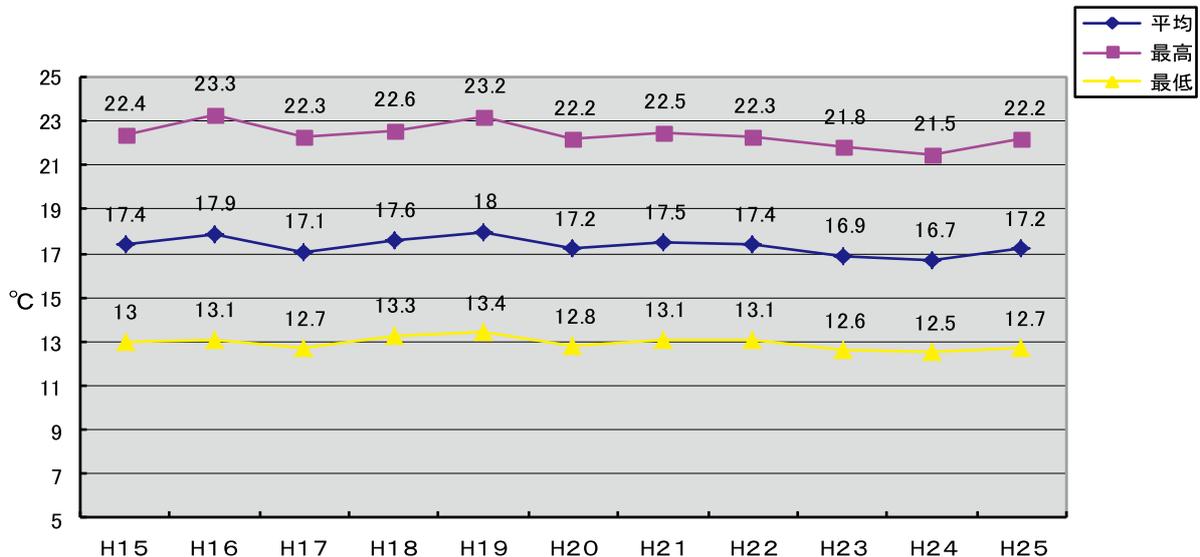


図6 宇土市の年間気温（熊本地方気象台資料より）

(4) 生態系 (図7, 写真5~7)

植物類 宇土市域には約800種類もの植物が自生しており、このうち樹木は120種で、シイ類やカシ類に代表されるブナ科の樹木は11種が確認されている。また、緑川や浜戸川の下流から河口付

近に分布するヨシ群落は九州最大級である。

熊本県の植生は、大きく常緑広葉樹林帯（ヤブツバキクラス域）と落葉広葉樹林帯（ブナクラス域）に分けられる。前者は本県の600～700m以下の平野部および丘陵帯に広がり、宇土半島もこの領域に含まれるが、人間の生活圏内にあり土地利用が早くから進んだため、水田や畑、スギ・ヒノキ造林地、果樹園、竹林等が大部分を占める。宇土半島の自然本来の植生を特徴づける自然林（極相に近い状態の森林）は、人間生活から切り離された住吉神社（宇土市住吉町）の社寺林等にわずかに見られる程度である。

宇土半島において、モザイク状に残された自然林はいわゆる雑木林と呼ばれるシイ・カシ萌芽林で、かつて薪炭林として15～20年という間隔で定期的に伐採され利用されてきた二次林である。昭和40年代以降、人間の利用がほとんどなくなり放置され、現在、遷移が進んでいる状態にある。

動物類 環境省の自然環境基礎調査（2002～2004年）によれば、有明海の干潟に生息する貝類・カニ類・ゴカイ類等の底生動物の種数は88種で、国内では最も種類が多い。市域北側の緑川河口から網田海岸の干潟には、有明海の特産種であるムツゴロウや有明海以外ではまれなシオマネキ等が生息するほか、アサリ・ハマグリ・マテガイ等の二枚貝も豊富である。また、希少種で二枚貝に似たミドリシャミセンガイもわずかに生息している。沖合では、イカ類やコノシロ、ボラ類等が多い。一方、宇土市の淡水魚は、以前生息したものを含めてコイ科やハゼ科等、79種類以上が確認されている。陸生哺乳類は、本県において約40種近く生息しており、宇土半島ではジネズミやアカネズミ、コウベモグラ、アブラコウモリ、ノウサギ等、21種が確認されている。近年、タヌキとイタチ類が目立ち、平成7（1995）年頃からは、宇土市街地でも見られるようになった。また、イノ

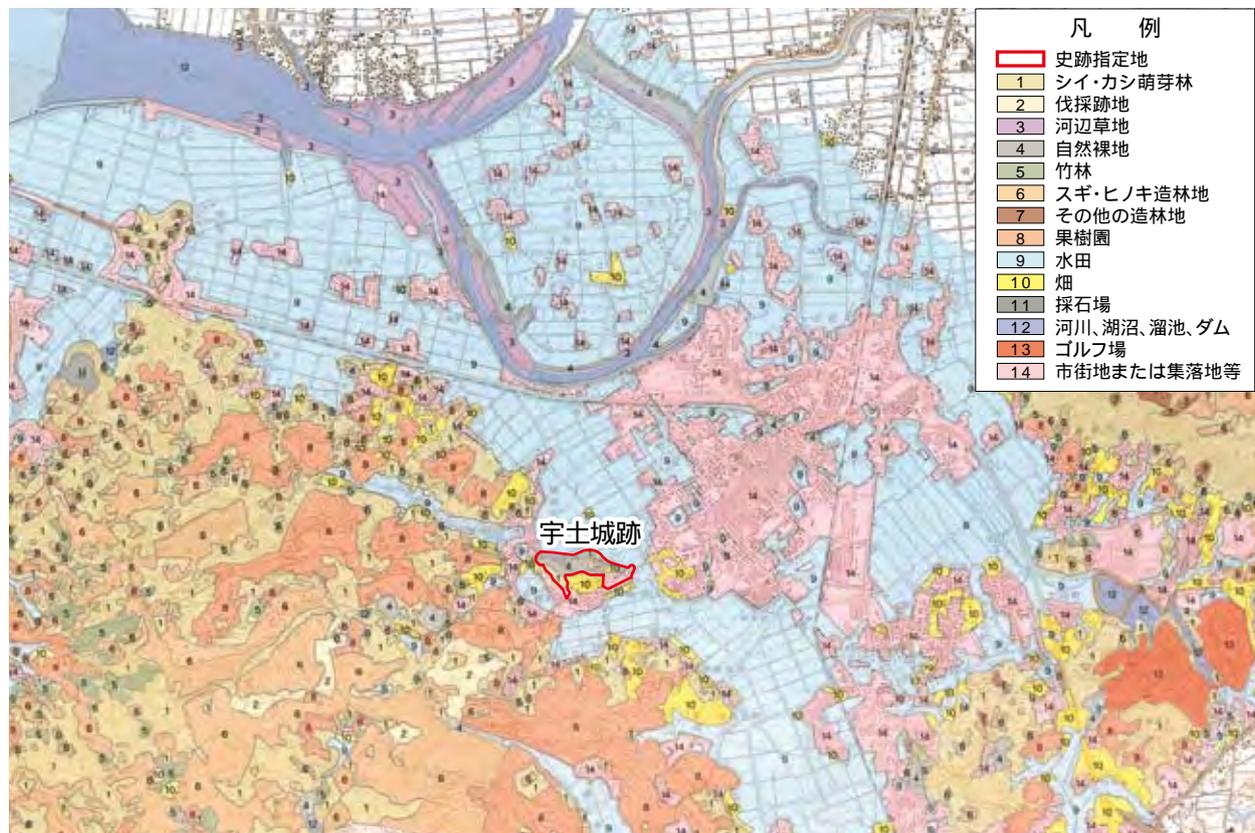


図7 宇土半島基部地域の植生図（田代 2003a を一部改変）



写真5 住吉神社付近の自然林

シシヤ特定外来生物に指定されているタイワンリスによる果樹や野菜等の農作物の被害が近年発生しており大きな問題となっている。

その他，宇土市においては，爬虫類・両生類はカメ類やヘビ類，カエル類等が20種，鳥類は市鳥・メジロやヒバリ，アマサギ等126種類，昆虫類はトンボ類やカマキリ類，バッタ類等16目228科2010種と多種多様な生物が確認されている。



写真6 ムツゴロウ



写真7 シオマネキ

第2節 社会的環境

(1) 宇土市の成り立ち(図8)

平安時代中期の『和名類聚抄』によると，律令時代の宇土郡は，現在の宇土市と宇城市不知火町・松橋町の一部を含んでおり，諫染・桜井・林原・大宅の4つの里(郷)が存在した。中世になると，宇土庄・古保里庄・阿蘇社領甲佐領勾野・阿蘇社領郡浦社領の4つの荘園が確認できる。近世に入り，小西氏や加藤氏の時代を経て，正保3(1646)年に宇土細川藩(3万石)が成立。その藩領は，宇土郡(松山・郡浦手永)及び下益城郡(杉島・廻江・河江・中山手永)の2郡6手永におよんだ。

明治初期の廃藩置県を経て，明治21(1888)年の市制町村制の制定に伴う大合併により，宇土町，花園村，轟村，緑川村，網津村，網田村が誕生し，明治7(1874)年に合併した走潟村を加えて，現在の宇土市域に相当する地域において1町6村が戦後まで続いた。

昭和28(1953)年，町村合併促進法の制定公布に伴い，翌年には宇土町と花園村，轟村，走潟村，緑川村が合併して宇土町となり新たに町制を施行し，さらに昭和31年の三拾町の編入，昭和33年の宇土町と網田村の合併により宇土市が誕生した。本市の地区割りは，旧町村を反映したものとなっており，東より花園地区，宇土地区，轟地区，走潟地区，緑川地区，網津地区，網田地区の7地区である。

平成11(1999)年，市町村の合併の特例に関する法律の一部改正に伴い，「平成の大合併」が全

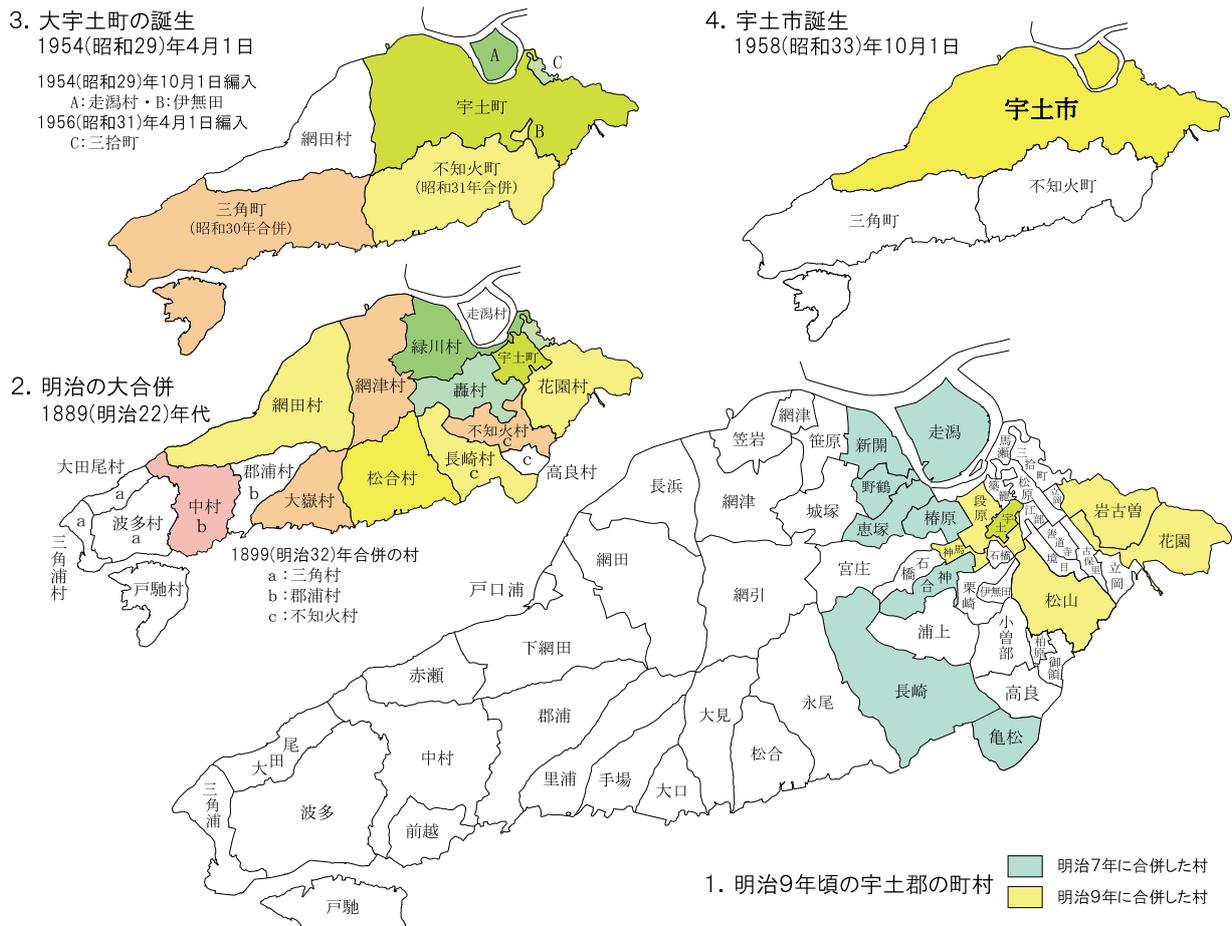


図8 近代・現代の宇土郡における市町村合併（宇土市史編纂委員会編 2009より）

国に広がった。宇土市も下益城郡富合町との1市1町合併をめざし、平成14年に法廷協議会が設置され、合併へ向けて動き出すこととなったが、その後の曲折を経て富合町との合併は頓挫し、現在に至る。なお、富合町は平成20年10月に熊本市と合併した。

（2）人 口（図9）

昭和33年の合併時における市の人口は34252人、世帯数は6417戸で、その後しばらくは緩やかに減少したが、昭和50（1975）年頃から徐々に増加に転じ、平成16（2004）年の38824人（宇土市住民基本台帳）をピークとして以降は微減傾向にある。これに対し、世帯数は一貫して増加傾向にあり、現在、市制施行時とくらべて約2倍となっている。平成27（2015）年の国勢調査速報値人口は37053人で、世帯数は13284世帯である。人口が増加しているのは花園地区のみであり、それ以外の地区は減少している。また、平成25年10月1日現在における65歳以上の高齢者は9791人、高齢化率は26.2%で、全国平均の25.1%、県平均の27.2%と大きな差はない。

しかし、全国的な動向と同じく年々割合が高まっているとともに、人口も減少することが予想されており、平成52（2040）年の宇土市の人口予測は30600人で、平成22年度を100とした場合、81.1%と2割程の減少が見込まれている（国立社会保障・人口問題研究所『日本の地域別将来推計人口』〔平成25年3月推計〕）。

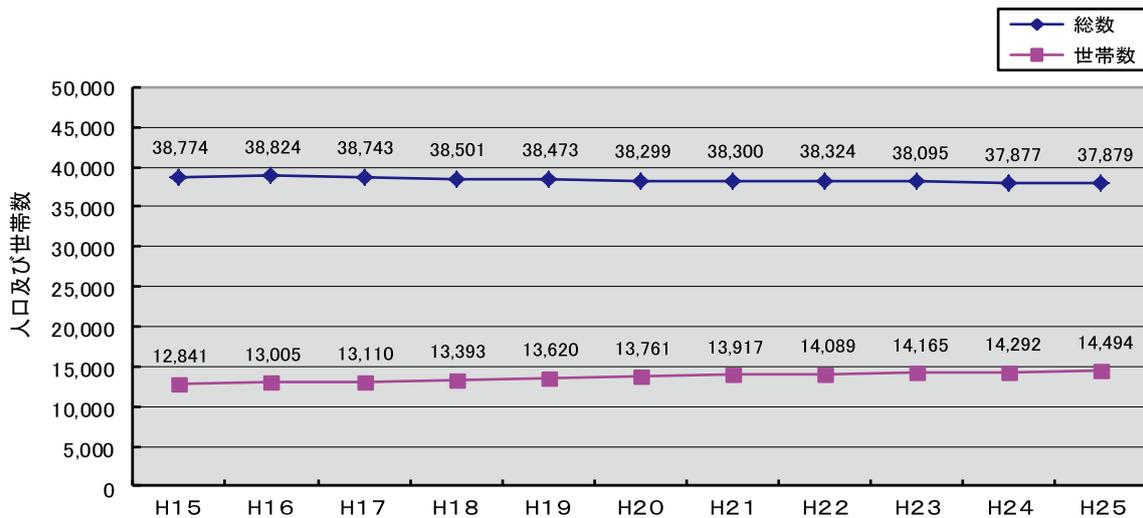


図9 宇土市の人口推移（「宇土市住民基本台帳」より）

（3）交 通

J R宇土駅の南西側一帯に広がる中心市街地から熊本市中心部まで車で約30分、九州自動車道松橋インターまで同じく約20分の距離に位置しており、交通の便の良さから市東部の花園地区では熊本市のベッドタウンとして人口が増加している。

宇土市街地東側には、九州を南北に縦貫する国道3号線とJ R鹿児島本線が延びている。また、市街地北側には、宇土半島北側沿岸を東西方向に国道57号線及びJ R三角線が位置しており、さらに国道57号線から北に分岐する形で国道501号線が延びている。本県における主要道路や鉄道が東西南北に存在することから、本市は九州西部沿岸における重要な交通結節点のひとつに数えられる。県道は6路線、市道は1038路線（全長約503km）で、改良率48.3%、舗装率85.1%である。なお、熊本天草間幹線道路の一部を構成する地域高規格道路の整備が現在進められている。

J R鹿児島本線とJ R三角線の結節点となる宇土駅は、平成22年3月に新しい駅舎と広場が整備され、国道3号線に面する駅東側からのアクセスが可能となって利便性が高くなった。この宇土駅を起点とするJ R三角線は約26kmのローカル線で、三角駅（宇城市三角町）を終点とする。沿線住民の移動手段としての利用のほか、熊本市と天草諸島を結ぶルートの一部を形成する観光列車特急が平成23年に運行を開始し、多くの観光客が利用している。

その他、国道や県道等の主要道路の路線バスのほか、市民の交通手段の充実を図る一環として、平成24年10月よりコミュニティバスと乗合タクシーの試行運行を開始している。

（4）産 業（図10、写真8）

宇土市の産業構造は、サービス業や卸売・小売業を主とする第3次産業が中心で、第1次産業及び第2次産業は減少傾向にある。平成22年における本市の産業別就業者数は、第1次産業が1816人（10.6%）、第2次産業が4045人（23.6%）、第3次産業が11304人（65.8%）であり、平成23年の民営事業所数は1402ヶ所、従業員数は12094人である。

第1次産業 農林業については、平坦部の水田と山間山麓に造成された畑を生産基盤として、米や施設園芸、野菜、たばこ、果樹等を組み合わせた複合経営が中心となっている。林業については、森林所有者の約90%が5ha未満の小規模林家で、そのほとんどが農業に付随して経営を行っている。

近年，農業者の後継者不足が深刻化し，農家数は平成12年の1633戸から平成22年の916戸と大幅に減少（43.9%減）している。水産業については，水産資源や漁港の立地条件に適している西部地区を中心に営まれており，特に海苔養殖やアサリを主とした採貝やエビ・イカ漁が盛んに行われている。平成26年度における本市の漁業協同組合員は654名であるが，専門的に漁業を行っている人は半数にも満たない307名にとどまる。

第2次産業 製造業就労者（全就業者の15.3%）が最も多い。市では，産業の振興と雇用機会の創出を図るため，市内3ヶ所に整備した工業団地への企業誘致を積極的に推進しており，現在，ほぼ完売状態にある。出荷額も平成21年の656億円から同25年度には794億円に増加（21.0%増）しており，事業所数は55から56とあまり変わらないが，従業員数は2178人から2317に増加（6.4%増）している。

第3次産業 本市の就労者全体の約65.8%（平成22年）と多数を占めており，平成17年の61.9%から増加している（3.9%増）。本産業のうち，平成22年においては卸売・小売業（全就業者の8.3%），医療・福祉（同13.0%）等が中心となっているが，商店数や従業員数は，平成14年の418店，2659人から同23年の256店，1686人と大幅に減少しており，近隣都市への郊外型大型商業施設の進出や長引く景気低迷等が原因と考えられる。中心市街地においては，全国的な傾向として経営者の高齢化や後継者不足による廃業から空き店舗が増加している。

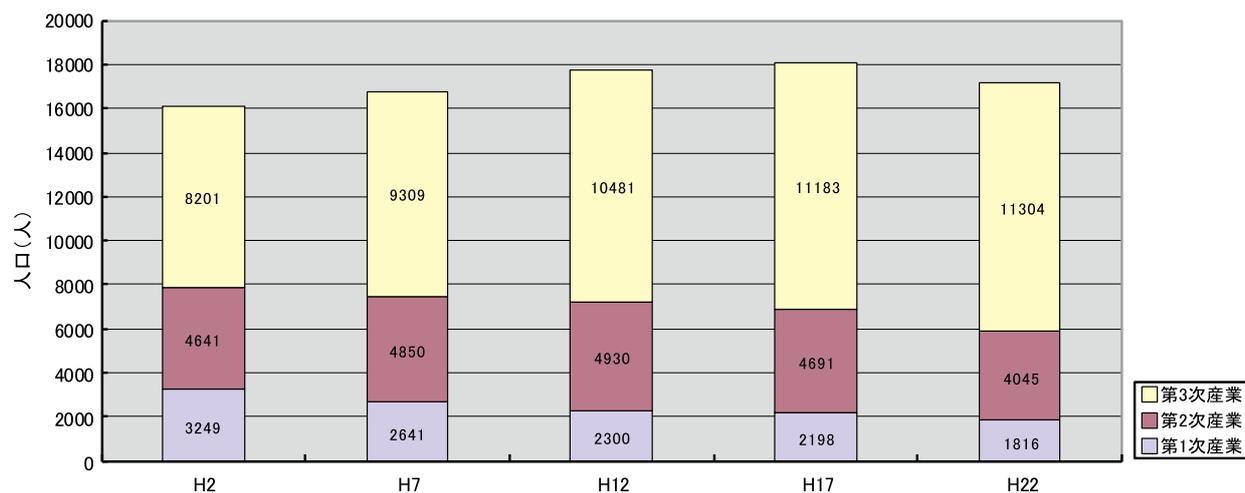


図10 宇土市の産業別就業人口(「宇土市統計資料」より)

(5) 土地利用 (図11, 写真9)

市の東部地域を中心に平野部が広がり，産業系や住居系の土地として利用されており，現在も多くの優良農地が残る。一方，西部地域は主に山間部と沿岸部に分けられる。前者は大岳を中心として標高300m～500mの山々が連なり，一部の国有林を除き民有林，樹園地等が広がっている。後者は，海苔等の栽培漁業を営む漁業集落が点在している。平成25年度における本市の土地利用状況で最も多い地目は，山林の24.98km²で，市全体の約34%を占めている。続いて田の14.25km²（約19.2%），畑9.19km²（約12.4%），宅地7.84km²（約10.6%）の順となっている。



写真8 海苔収穫のようす



写真 9 宇土市街地航空写真（上が北）

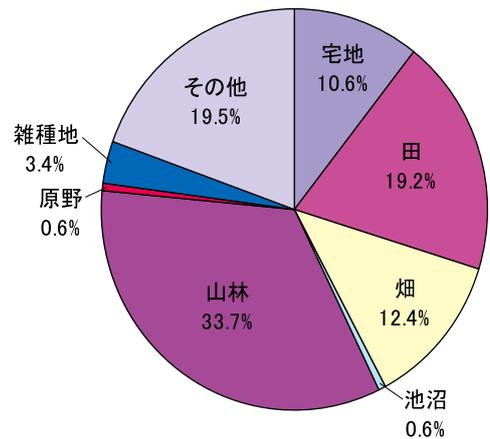


図 11 地目別土地利用状況
（平成 25 年度）

第 3 節 歴史的環境（図12～14，写真10～17）

（1）原始・古代

旧石器時代 宇土市内唯一の旧石器時代の遺跡として田平遺跡がある。発見された旧石器は 2 点で、その器種はナイフ形石器とスクレイパー（削器）である。2 万年～1 万 5 千年前のものとみられ、現段階において本市における人類最古の痕跡といえる。

縄文時代 市東部の宇土半島基部に遺跡が集中しており、石ノ瀬遺跡、轟貝塚、曾畑貝塚、西岡台貝塚、馬場遺跡等がある。草創期までさかのぼる遺跡は確認されていないが、石ノ瀬遺跡や轟貝塚、曾畑貝塚では、縄文時代早期の押型文土器が出土している。

轟貝塚と曾畑貝塚は、学史的に重要な貝塚として広く知られている。轟貝塚は縄文時代早期末から前期の轟式土器の標式遺跡で、縄文時代早期から後期にかけての土器、石器、骨角器、貝製品、人骨等の多種多様な遺物が出土している。曾畑貝塚は縄文時代前期後半の曾畑式土器の標式遺跡で、早期から後期の土器や石器のほか、隣接する曾畑低湿地遺跡からは、当時食料としていたドングリ（堅果類）の貯蔵穴や有機質遺物が数多く出土している。轟貝塚に隣接する西岡台貝塚（前期～後期前半）でも、堅果類の貯蔵穴を検出しており、馬場遺跡では曾畑式土器が出土している。

弥生時代 縄文時代と同様に、宇土半島基部に遺跡が集中している。主な遺跡として、宇土城跡城山遺跡、境目遺跡、善導寺遺跡、畑中遺跡、石ノ瀬遺跡、北平遺跡、下松山遺跡等があるが、拠点的な集落は、宇土城跡城山遺跡と境目遺跡、善導寺遺跡に存在したとみられる。

宇土城跡城山遺跡では、前期の環濠や中期の甕棺墓が発見されており、後期終末の土器群が多量に出土している。前期から後期終末まで一貫して存続しており、規模が大きな集落が存在したとみられる。また、境目遺跡と善導寺遺跡は、同一台地上に隣接しており、本来一連の集落と考えられる。両遺跡からは、中期前半の溝跡や中期前半から後期終末にかけての多量の土器、石器のほか、祭祀土器とみられる赤彩を施した土器や石戈等、特殊な遺物も出土しており、特に群をなす甕棺墓の分布としては九州島で最南端にあたる点は注目される。

その他、成人女性が埋葬された甕棺墓が見つかった畑中遺跡、朝鮮系無文土器が出土した石ノ瀬遺跡、中期後半の黒髪式甕形土器が出土した北平遺跡、原形を保った重弧文長頸壺（免田式土器）

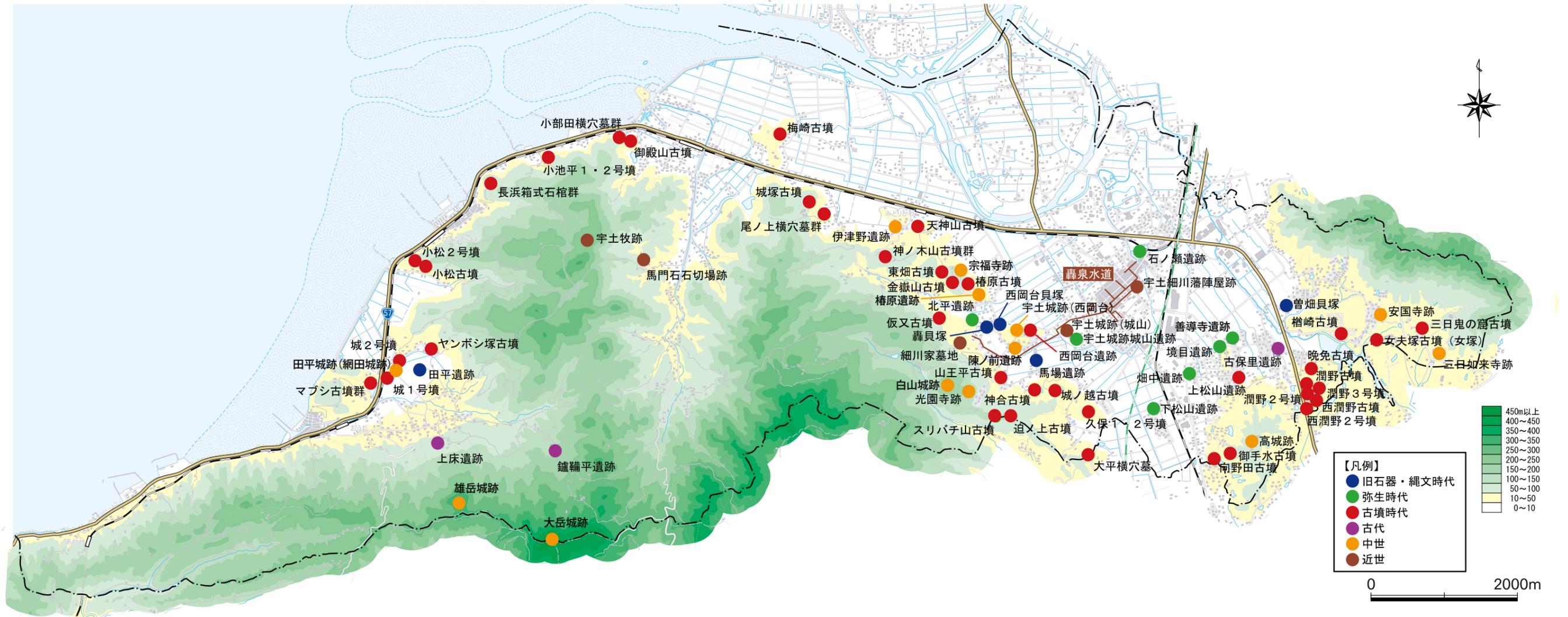


図 12 宇土市内主要遺跡等分布図（複合遺跡は中心となる時代を表記）



写真 10 曾畑式土器（曾畑貝塚出土）



写真 11 上松山遺跡検出の方形周溝墓



写真 12 向野田古墳石棺内状況及び棺内出土品（国指定重要文化財）



写真 13 宇土城跡（城山）航空写真

が出土した後期の集落とみられる下松山遺跡がある。

古墳時代 宇土半島基部に集落や規模が大きな古墳が分布しており、縄文・弥生時代と同様に遺跡分布の中心であるが、西部の網津地区や網田地区にも小規模な古墳が分布している。また、主な遺跡として、宇土城跡城山遺跡、西岡台遺跡、境目遺跡、上松山遺跡、馬門石石切場跡等がある。

宇土城跡城山遺跡では、古墳時代前期の土器がまとまって出土しており、弥生時代以来の集落が継続していたとみられる。これに対し、城山遺跡から西方300mの西岡台遺跡では、周囲を断面V字形の堀で囲まれた古墳時代前期の首長居館を確認している。宇土半島基部の首長が城山遺跡から独立して西岡台遺跡に居館を築く一方、城山遺跡は一般民衆の集落として継続した可能性が高い。なお、この首長居館と重複する状態で宇土城跡の主郭「千畳敷」が立地している。

城山遺跡と同様に、境目遺跡や善導寺遺跡も弥生時代から継続する拠点的な集落であり、前者では、古墳時代前期の竪穴住居跡や箱式石棺を検出しており、土師器が多量に出土した。近隣の上松山遺跡では、弥生時代終末期から古墳時代前期に属する竪穴住居跡や方形周溝墓群を確認しており、住居の廃絶後、方形周溝墓群が形成されたことがわかっている。これらの周溝墓群は、宇土半島基部地域における前期の前方後円墳に先行するとみられ、本地域の墳墓の動向を知るうえで重要である。

市西部の網津地区に位置する馬門石石切場跡は、約9万年前の阿蘇山の火砕流によって形成された阿蘇溶結凝灰岩の採石遺跡で、中国・近畿地方の有力豪族用の石棺や周辺地域に分布する古墳の石材等として用いられた。古墳時代の石切丁場跡とみられる地点からは、柱穴とみられる遺構や土器が出土した。

宇土半島には数多くの重要な古墳が存在するが、前方後円墳が存在するのは同基部地域のみで、市西部地域や、宇土半島先端より連なる天草諸島では確認されていない。主な前方後円墳として、本県最古の前方後円墳であり船載三角縁神獣鏡が出土した城ノ越古墳や迫ノ上古墳、スリバチ山古墳、向野田古墳、天神山古墳等があり、いずれも前期の前方後円墳である。当時、宇土半島基部地域に初期ヤマト王権と関係をつないだ有力な地域勢力が存在したことをうかがわせる。

向野田古墳では未盗掘の竪穴式石室が発見され、長大な舟形石棺に埋葬された成人女性の人骨とともに、鏡や武器類、装身具等の貴重な遺物出土した。これらの出土品は、国指定重要文化財に指定されている。また、前期後半に築造されたとみられる天神山古墳は、墳長約107mの規模を有する宇土半島最大の前方後円墳であり、県下でも最大規模をほこる。

西部地区の網津・網田地区においても、初期横穴式石室を主体部とする城2号墳、石障系横穴式石室の城1号墳、古墳の石室に描かれた船の装飾としては、我が国で最も古い5世紀前半のヤンボシ塚古墳、日本最大級の船の装飾が描かれた梅崎古墳等の重要な古墳が分布している。

古代 律令制下の地方行政区分は、国郡里制で出発したが、「肥後国宇土郡」の名称もこの時に正式に定まった。宇土郡の郡家を古保里遺跡や境目遺跡、宇城市松橋町の曲野・寺尾遺跡に想定する説があるが明確ではなく、郡境の位置も確定されていない。

『和名類聚抄』によると、宇土郡は諫染・桜井・林原・大宅の4つの郷からなっていたが、半島部の網津・網田付近とされる大宅郷以外は、郷名を伝える関連史料や地名が残っていないが、比定地については、宇土半島基部地域とする説がある。熊本県球磨郡錦町下り山窯跡からは、「…国宇土郡/…井郷夫人/…人桀大伴公」とヘラ書きされた甕片が出土しており、肥後国宇土郡桜井郷夫人と考えられ、下り山須恵器工人の出自を示すと推定されている。

古代の遺跡は、弥生・古墳時代にも集落が形成されていた遺跡が多く、以前と同様に宇土半島基

部地域が分布の中心である。境目遺跡，善導寺遺跡，上松山遺跡，古保里遺跡，畑中遺跡，宇土城跡城山遺跡，西岡台遺跡，田平遺跡等がある。境目遺跡や善導寺遺跡では，古代の土器が多く出土しており，比較的規模が大きな集落の存在が想定され，境目遺跡では律令期の官人が身に着ける腰帯の飾りである瑪瑙製鈔具（丸鞆）が出土している。また，宇土半島には条里推定地が多く，市内では宇土地区から花園地区かけての市街地東部，走潟地区，網田地区等の平地が想定されている。

（２）中 世

鎌倉時代 鎌倉時代初期の宇土郡には，宇土庄・古保里庄・阿蘇社領甲佐領勾野・阿蘇社領郡浦社領の４つの荘園があり，現在の宇土市街地付近に宇土庄が位置し，その東部に古保里庄，古保里庄の南部に甲佐領勾野，宇土郡の西半分に郡浦庄が位置した。これらの荘園のうち，最も古く成立したのは郡浦社領郡浦庄で，久安６（1150）年には存在していたとみられる。また，走潟は飽田郡河尻庄の一部であった。

宇土庄は，宇土郡の郡名を冠する郡名荘といわれる王家（天皇家）領荘園で，承久３（1221）年の「尊長法印所領状写」に蓮華王院領宇土庄として初めて現れる。蓮華王院領とあるように，宇土庄は平安時代後期までに後白河上皇に寄付され，後に後白河上皇がほかの荘園と一括で本家職を蓮華王院（京都市）に寄付した際に蓮華王院領に移管されたとみられる。

鎌倉時代後期には，蒙古襲来を契機として日本全国において鎌倉幕府の支配権が強化され，宇土庄や古保里庄は蓮華王院領から離れて北条得宗領化していたと考えられている。しかし，正慶２（1333）年，足利高氏（後の尊氏）らによって鎌倉幕府が滅亡し，宇土郡内の大部分の地域に対する北条氏支配も終焉した。

南北朝・室町時代 南北朝の内乱勃発後，征西将軍として九州へ派遣された懐良親王は，正平３（1348）年，薩摩から宇土津に着船，宇土庄を本拠とする宇土高俊が迎え入れた。宇土氏は，宇土庄を現地管理した武士で，宇土郡の代表的な領主であったと考えられる。肥後南部における南朝方の主力であったが，南北朝合一を迎え，応永２（1395）年，北朝方の九州探題今川了俊に降伏した。宇土氏に関する文献史料は宇土為光が登場する文明４（1472）年まで途絶え，その間の系譜については明らかではない。為光は菊池氏全盛期の肥後・筑後守護であった持朝の子で，宇土忠豊の養子となって宇土氏の家督を継承した。文亀元（1501）年の菊池氏直轄領家臣団の内紛に伴って失脚した菊池能運に変わり，為光は３年にわたり守護の地位にあったが，文亀３（1503）年，相良氏や阿蘇氏らの協力を得た能運は，為光とその子重光らを殺害，これによって宇土氏は滅亡し，能運は肥後国守護に復帰した。

一方，八代を本拠とした名和氏は，文亀４（1504）年，名和顕忠は居城である古麓城（八代市古麓町）を菊池氏や相良氏によって追われ，守富庄の木原城（熊本市南区富合町）に移り，その後，宇土氏滅亡後の宇土城に入った。名和氏が宇土城に入った後も相良氏との間に争いは絶えず，相良領と名和領の境目である豊福領（宇城市松橋町）をめぐる幾度となく争ったことが，相良氏八代支配時代の記録史料『八代日記』から知ることができる。豊福領の帰属は，長享元（1487）年から永禄８（1565）年まで80年足らずの間に名和氏と相良氏との間で９回も入れ替わっており，攻防の激しさがうかがえる。

名和氏に関する文献史料や石塔の銘文等が示すその領域支配は，郡浦庄を除く宇土郡，益城郡や八代郡の一部地域（木原や豊福）に限られ，これらの地域には田平城跡（網田城跡，宇土市上網田



図 13 名和氏関係城郭位置図（鶴嶋 2013 を参考として作成）



図 14 中世における宇土の道（宇土市史編纂委員会編 2009 より）

町），木原城跡（熊本市南区富合町），郡浦城跡（宇城市三角町）等の中世城跡が位置する。宇土半島における交通結節点に位置する宇土城は，これらの城と三角道や木原道等の中世までさかのぼる古道を通じて結ばれていた。

80年以上にわたって宇土支配を維持した名和氏であったが，天正15（1587）年，豊臣秀吉の九州



写真14 名和武顯位牌(左)と名和行興位牌(右)

平定によって名和顯孝は宇土城を開城した。さらに翌年、秀吉は顯孝を筑前小早川領内に知行500町で召し抱えるよう小早川隆景に指示し、これにより名和氏は宇土の地から切り離されることとなった。

名和家菩提寺は曹洞宗宗福寺(宇土市椿原町)で、本尊の地蔵立像と並んで宇土名和氏二代武顯や同三代行興の位牌が安置されており、御堂の脇には同五行直の墓石をはじめとする中世石塔群や六地蔵がある。

本寺は、宇土名和氏初代顯忠か2代武顯が建立したと推定され、御堂脇の墓域には名和氏代々とその親族が葬られたとみられる。天文15(1546)年6月には、武顯の葬儀が営まれ、相良氏からの弔いの使僧も派遣され参列した記録がある(『八代日記』)。宗福寺が立地する高台から見下ろす位置にある宇土市椿原町字船津には、中世の湊である「宇土津」が存在したとみられ、宇土から有明海側に出るための湊として機能したと考えられる。

中世の遺跡として、宇土城跡、椿原遺跡、境目遺跡、善導寺遺跡、三日如来寺跡、伊津野遺跡、轟遺跡等がある。宇土城跡では土器や陶磁器、石塔等が大量に出土しており、陳ノ前遺跡、伊津野遺跡では、土器・陶磁器が出土している。宗福寺に隣接する椿原遺跡では、方形居館とみられる遺構を取り囲む箱堀を検出している。

(3) 近 世

安土・桃山時代 天正16(1588)年、秀吉は肥後国衆一揆の責任をとらせて佐々成政を改易すると、緑川を挟んで肥後北半を加藤清正へ、同じく南半の宇土・益城・八代・天草の四郡の計14万6千石を小西行長に与えた。行長は宇土を本拠とし、翌年には宇土城(城山)の築城に着手、城下の整備にもとりかかったとみられるが、朝鮮出兵とその後の和平交渉等により宇土で活動した期間はさほど長くはなかったと考えられている。

慶長5(1600)年の関ヶ原合戦において、行長は西軍の主力として参戦したが敗北し、京都で処刑された。この頃、肥後では加藤軍による小西領内への軍事侵攻が行われ、宇土城攻めにより城代・小西隼人をはじめとする小西勢は、約1ヶ月にわたる戦いを経て城を明け渡した。隼人は熊本に赴き切腹したが、残る家臣は助命され、清正の家臣として召し抱えられるなどした。

宇土城跡(城山)本丸の発掘調査では、小西時代の石塁(野面積み)や門礎、礎石建物跡を検出し、中国製の陶磁器(青磁・白磁・染付)や備前焼、鉄砲玉等の遺物が出土している。

江戸時代 小西領を引き継いだ清正は、城山を改修。本丸を嵩上げするとともに打込ハギによる石垣普請を行った。発掘調査



写真15 小西行長銅像

により加藤時代の門礎や排水溝等の遺構を検出し、瓦や陶磁器等が出土している。清正は、慶長16（1611）年に亡くなり、その翌年、幕命により水俣城や矢部城とともに破却され、さらに天草島原の乱後にも大規模な破壊を受けた。

寛永9（1632）年、細川忠利は除封となった加藤忠広に代わり小倉より入封。熊本藩54万石の初代藩主となった。正保3（1646）年、二代藩主細川光尚は、叔父・細川立孝の子・宮松に宇土郡と益城郡のうち約3万石を与えて宇土支藩（以下、宇土藩）が誕生し、宮松は名前を行孝と改め、初代宇土藩主となった。宇土藩成立後、現在の宇土市新小路町や門内町等に藩主の陣屋や家臣団屋敷が整備されるとともに、物流の拠点として機能した船場周辺には藩の蔵屋敷が建ち、周辺には船着場や船奉行の屋敷等が配置された。宝暦年間（1751～1764）、宇土は熊本藩の主要都市である五ヵ町（熊本・高橋・川尻・八代・高瀬）の次に位置づけられる准町となった。また、幕末に参勤交代が終焉を迎えると、宇土藩は在府家臣の帰国に備えて武家屋敷（定府屋敷）を本町一丁目南側に新たに造成した。

宇土藩は、初代行孝以後、十一代行眞まで続くが、宇土藩六代藩主立禮と同八代藩主立政は、前者が熊本藩八代藩主細川斉茲、後者が同十代細川斉護として本藩を相続している。歴代宇土藩主のうち、五代藩主興文（1723 - 1785）は名君として知られ、疲弊した藩の財政再建を行っただけでなく、行孝時代の1663（寛文3）年に敷設された轟泉水道の改修や藩校温知館を設置した。また、茶道や漢詩文等、芸術・文化面にも優れた才能を発揮した。なお、轟泉水道は、現在も約100世帯で使用されており、現存する上水道としては日本最古として知られている。



写真 16 轟泉水道取入口

（4）近現代

近代 明治2（1869）年の版籍奉還後も宇土藩は存続したが、翌年に宇土藩は熊本藩に吸収合併された。明治4年の廃藩置県により、全国に300あった藩は一斉に廃止されて県となった。同12（1879）年、宇土町に郡役所がおかれたが、同14年には飽田、詫麻に合併された。同23（1890）年、郡制が公布され、それに伴い宇土郡役所は宇土郡三角浦村に設置されることとなったが、同33年までは宇土町の藩校温知館跡地にあり、移転後も宇土町に出張所が置かれた。

温知館は明治5（1872）年より宇土小学校となり、同18（1885）年に現在の宇土市民会館敷地へ移転した。その隣接地には、同25（1892）年、最後の宇土藩主細川行眞が地域教育振興等を目的に私立鶴城学館を開館。実業主義重視の経営方針をもとに、上羽勝衛を館長に任じ、男女青少年層を対象として4科8コースを設けたが、同33（1900）年の金融恐慌のあおりを受け、同35年に閉館となった。

明治時代の宇土の特徴として、熊本県南における商工業の中心地として発展したことがあげられる。明治12（1879）年に第百三十五国立銀行が開業、順調に業績を重ね、同29（1896）年に株式会社九州商業銀行と改名。県内各地や福岡市、佐賀市等にも支店を配し、同33年の金融恐慌も乗り越えて現在の肥後銀行の基礎を築いた。その他、様々な企業が宇土に誕生したが、マッチ製造や精米事業も手がけていた舞鶴合資会社による電気事業により、同29（1896）年、熊本市について二番目に電灯が灯った。同32（1889）年には、九州鉄道株式会社により宇土 三角間を結ぶ三角線



写真 17 舞鶴社マッチ商標

が開業。政府の鉄道敷設命令書によれば、三角線は門司港と三角港を結ぶ九州鉄道本線として許可された。三角線開業に伴って宇土から三角に通じる道路が狭くなったが、拡幅や改良が行われて昭和15（1940）年に臨港道路として全線開通した。

戦争の影が濃くなりつつあった昭和14（1939）年、日本合成化学宇土工場の建設が決まり、製造設備の整備が進められたが、同20（1945）年の度重なる空襲で工場の

ほとんどを破壊された。また、終戦直前の大規模な空襲により、本町を中心とする市街地は大きな被害を受けた。

現代 昭和20年10月、戦後初めて宇土町議会が開催された。その後、戦災を受けた宇土駅舎の新築や鶴城中学校の開校、宇土町役場が完成する等、戦争からの復興の兆しがみえ始めた時期に、町村合併も進み、昭和33（1958）年10月1日に県下11番目の市として宇土市が誕生した。

初代市長大和忠三は、「文化的田園工業都市づくり」をスローガンとして掲げ、折からの高度経済成長を追い風として、公営住宅建設、工業誘致、上下水道建設、道路整備、市民会館、体育館建設等の施策を積極的に推進し、連続6期24年間にわたって宇土市の基礎を築いた。

空襲の被害を受けた市街地は、高度成長期に拡大・整備されて賑わいをみせたが、産業構造の急激な変化や大型スーパーの全国展開が本格化した1970年代以降、売り上げの低迷や後継者不在による廃業が増え、現在は郊外の主要道路沿いに大型店舗が立地している。一方、工業については、大和市制時代、国道3号線と57号線沿いに工業用地を確保して積極的な企業誘致を行い、多くの企業が進出して工業団地が形成された。

また、水産業において特筆されるのは、人工採苗技術による養殖ノリの増産があげられる。ドゥルー女史のノリの糸状体発見と熊本県水産試験場太田扶桑男技師による人工採苗技術により、昭和30年代にはノリの生産高が飛躍的に伸び、有明海沿岸地域は国内屈指の養殖ノリ生産地となっている。

【引用・参考文献】

- 綾 一 2003「宇土半島の気象」『新宇土市史』通史編第1巻 自然・原始古代 宇土市
 稲葉継陽 2007「戦国期の城と地域社会」『新宇土市史』通史編第2巻 中世・近世 同上
 宇土市 2011『第5次宇土市総合計画 元気プラン!』
 宇土市史編纂委員会編 2002『新宇土市史』資料編第2巻 考古資料・金石文・建造物・民俗 宇土市
 2003『新宇土市史』通史編第1巻 自然・原始古代 同上
 2007『新宇土市史』通史編第2巻 中世・近世 同上
 2009『新宇土市史』通史編第3巻 近代・現代・年表 同上
 2009『宇土の今昔百ものがたり』 同上
 熊本県地質図編纂委員会 2008『熊本県地質図（10万分の1）』（一社）熊本県地質調査業協会
 田代周史 2003a「宇土市およびその周辺の現存植生図」『新宇土市史』通史編第1巻 自然・原始古代 宇土市
 田代周史 2003b「植物」同上
 鶴嶋俊彦 2013「宇土名和氏領の中世城跡」『うと学研究』第34号 宇土市教育委員会
 林 行敏 2003「宇土半島の地形・地質・水」『新宇土市史』通史編第1巻 自然・原始古代 宇土市
 弘田禮一郎 2003「有明海の自然」『新宇土市史』通史編第1巻 自然・原始古代 同上

(5) 指定文化財一覧(国・県・市指定, 国登録有形文化財)

番号	種別	名称	所在地	備考
1	記念物(史跡)	宇土城跡(西岡台)	神馬町	
2	重要文化財(考古資料)	肥後向野田古墳出土品		市立図書館

番号	種別	名称	所在地	備考
1	有形文化財(建造物)	JR三角線網田駅本屋	下網田町	

番号	種別	名称	所在地	備考
1	記念物(史跡)	飯又古墳	恵塚町	
2	記念物(史跡)	樽崎古墳	花園台町	
3	記念物(史跡)	網田焼窯跡	上網田町	
4	記念物(天然記念物)	栗崎の天神楠	栗崎町	
5	有形文化財(彫刻)	木造釈迦如来坐像		如来寺
6	有形文化財(彫刻)	木造阿弥陀如来坐像		如来寺
7	有形文化財(彫刻)	木造薬師如来坐像		如来寺
8	民俗文化財(有形)	宇土雨乞い大太鼓及び関係資料		市大太鼓蔵
9	民俗文化財(無形)	宇土の御獅子舞		

番号	種別	名称	所在地	備考
1	記念物(史跡)	宇土城跡(城山)	古城町	
2	記念物(史跡)	晚免古墳	立岡町	
3	記念物(史跡)	明治天皇御立所跡	松山町	
4	記念物(史跡)	轟水源地及び樋管	宮庄町	
5	記念物(史跡)	住吉公園	住吉町	
6	記念物(史跡)	立岡公園一帯(立岡池, 花園池)	立岡町・花園町	
7	記念物(史跡)	轟貝塚	宮庄町	
8	記念物(史跡)	曾畑貝塚	岩古曾町	
9	記念物(史跡)	温知館跡	新小路町	
10	記念物(史跡)	天草四郎ゆかりの里	旭町	
11	記念物(史跡)	迫の上古墳	神合町	
12	記念物(史跡)	スリバチ山古墳	神合町	
13	記念物(史跡)	城古墳群	上網田町	
14	記念物(史跡)	境目西原遺跡	境目町	
15	記念物(史跡)	天神山古墳	野鶴町	
16	記念物(史跡)	小部田横穴古墳群	住吉町	
17	記念物(史跡)	長福寺(薬師堂)跡	下網田町	
18	記念物(史跡)	梅崎古墳	笹原町	
19	記念物(史跡)	小松古墳	長浜町	
20	記念物(史跡)	向野田古墳	松山町	
21	記念物(史跡)	如来寺遺跡	花園町	
22	記念物(史跡)	安国寺跡	花園町	
23	記念物(史跡)	堀内氏善の墓	石橋町	

番号	種別	名称	所在地	備考	番号	種別	名称	所在地	備考	番号	種別	名称	所在地	備考
24	記念物(史跡)	芭蕉塚	本町6丁目		52	有形文化財(建造物)	網津川眼鏡橋群	網津町・網引町	5基	80	有形文化財(絵画)	動物画		
25	記念物(史跡)	千体仏	城塚町		53	有形文化財(建造物)	古保里の六地藏	古保里町		81	有形文化財(絵画)	胎蔵界曼陀羅		
26	記念物(史跡)	遊目台	神合町		54	有形文化財(建造物)	放牛地藏	松原町		82	有形文化財(絵画)	青蘭画		
27	記念物(史跡)	細川家墓地	宮庄町		55	有形文化財(建造物)	中園邸(庭園を含む)	上網田町		83	有形文化財(絵画)	宇土八景		
28	記念物(史跡)	城塚町尾上横穴古墳群	城塚町		56	有形文化財(工芸)	尺八及び関係資料			84	有形文化財(絵画)	朱蘭画		
29	記念物(史跡)	不知火諾右衛門の墓	栗崎町		57	有形文化財(工芸)	網田焼		筆立・墨台・硯屏	85	有形文化財(絵画)	法然上人伝絵図		
30	記念物(史跡)	草野石瀧の墓	古城町		58	有形文化財(工芸)	茶つば(轟焼参考品)			86	有形文化財(絵画)	蕉夢庵記1巻(絵巻)		
31	記念物(史跡)	草野蒲川の墓	古城町		59	有形文化財(工芸)	網田焼染付桜花紋蓋付碗			87	有形文化財(書跡)	蕉夢庵記		
32	記念物(史跡)	帆足通楨の墓	神合町		60	有形文化財(工芸)	網田焼		8点	88	有形文化財(書跡)	生涯一片青山		
33	記念物(史跡)	片山中良の墓	神合町		61	有形文化財(工芸)	網田焼白磁牡丹形猪口			89	有形文化財(書跡)	一片氷心在玉壺		
34	記念物(史跡)	名和行直の墓	樽原町		62	有形文化財(工芸)	網田焼白磁牡丹形深皿・染付梅紋大皿			90	有形文化財(書跡)	茶奉書		
35	記念物(史跡)	泰雲寺跡	宮庄町		63	有形文化財(工芸)	網田焼染付山水詩文瓶・染付山水文平皿			91	有形文化財(書跡)	続葵花集		
36	記念物(史跡)	宗福寺跡	樽原町		64	有形文化財(工芸)	網田焼染付中尾内字入徳利・白磁牡丹形小皿			92	有形文化財(書跡)	詠和歌百首		
37	記念物(史跡)	山川青山の墓	神合町		65	有形文化財(工芸)	網田焼染付菊花紋銚子			93	有形文化財(書跡)	老僧半間雲半間		
38	記念物(史跡)	ヤンボシ塚古墳	上網田町		66	有形文化財(工芸)	網田焼染付九曜紋水指			94	有形文化財(書跡)	細川行孝公和歌集外一巻		
39	記念物(史跡)	寛政の津波供養碑	戸口町		67	有形文化財(工芸)	網田焼白磁牡丹形猪口			95	有形文化財(典籍)	宇土軍記		
40	記念物(史跡)	樽原古墳	樽原町		68	有形文化財(工芸)	細川九曜桜紋章陽透彫金二重唐草象嵌鉄鍔			96	有形文化財(典籍)	桂源遺稿と木版		
41	記念物(史跡)	寺尾勝信の墓	松山町		69	有形文化財(工芸)	細川九曜桜紋章陰透彫金二重唐草象嵌鉄鍔			97	有形文化財(古文書)	上羽家文書		
42	記念物(名勝)	網田海岸一帯	赤瀬町・下網田町		70	有形文化財(工芸)	脇差一振			98	有形文化財(考古資料)	三角縁四神四獣鏡		城/越古墳出土
43	記念物(天然記念物)	天神梅	石小路町		71	有形文化財(工芸)	桂原蕉夢庵屋根瓦			99	有形文化財(考古資料)	貝輪		向野田古墳出土
44	記念物(天然記念物)	船場川両岸の榎	石小路町・船場町		72	有形文化財(彫刻)	韋駄天像		如来寺	100	有形文化財(考古資料)	宇土城出土の軒平瓦		
45	記念物(天然記念物)	蔵の神の楠	網津町		73	有形文化財(彫刻)	寒巖禅師像		如来寺	101	有形文化財(考古資料)	下網田マブシの石棺		
46	記念物(天然記念物)	牧神社のイチヨウ	網津町		74	有形文化財(彫刻)	能面(尉面)		網田神社	102	有形文化財(考古資料)	免田式(重孤文)長頸壺		下松山遺跡出土
47	記念物(天然記念物)	しだれ桜	宮庄町		75	有形文化財(彫刻)	能面(嬬面)		網田神社	103	有形文化財(歴史資料)	島原の乱当時の細川家旗竿		
48	記念物(天然記念物)	赤瀬オハツキイチヨウ	赤瀬町		76	有形文化財(彫刻)	能面(娘面)		網田神社	104	有形文化財(歴史資料)	名和家位牌		2基
49	有形文化財(建造物)	船場橋	船場町		77	有形文化財(彫刻)	西岡神宮の能面		4面	105	民俗文化財(無形)	宇土松山花棒踊り		
50	有形文化財(建造物)	暦仁2年銘宝塔残欠	花園町		78	有形文化財(彫刻)	木造薬師如来坐像			106	民俗文化財(無形)	樽原雨乞い太鼓踊り		
51	有形文化財(建造物)	武家屋敷の表門	門内町		79	有形文化財(彫刻)	木造仁叟浄照坐像		法泉寺	107	民俗文化財(無形)	佐野山王祭礼(山王さん祭り)		

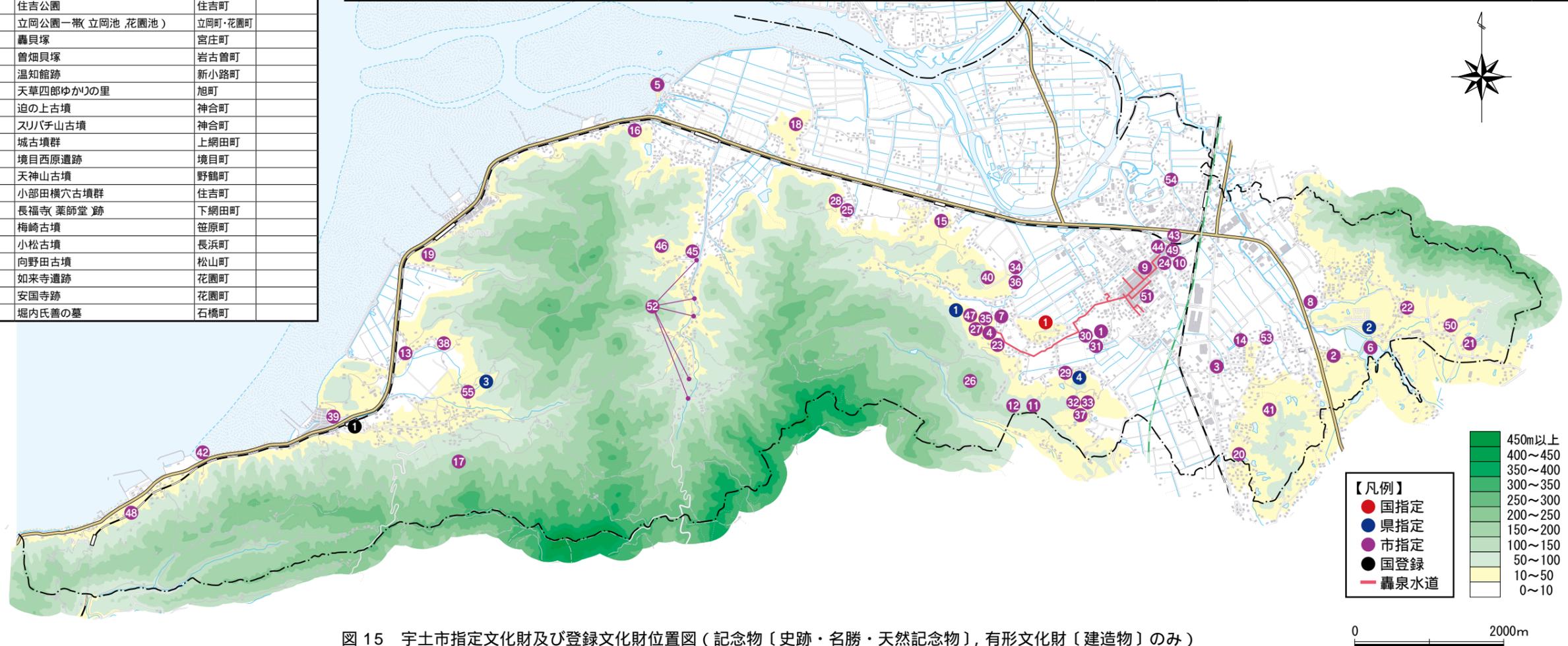


図15 宇土市指定文化財及び登録文化財位置図(記念物〔史跡・名勝・天然記念物〕, 有形文化財〔建造物〕のみ)